

第13回 豊川流域圏自然再生検討会 議事概要

開催日時：令和2年9月29日（火）14:00～15:50

開催場所：WEB会議

1. 開 会

2. 挨拶（豊橋河川事務所 所長）

3. 議 事

（1）第12回 豊川流域圏自然再生検討会 主な意見と対応

事務局より説明した。意見等なし。

（2）豊川自然再生事業の概要

事務局より説明した。委員からの主な意見は、次のとおり。

<ヨシ原再生>

- ・本川と放水路で、塩沼植物や魚類の出現状況が異なっている。水質環境や物理的条件の違いと生物の生息状況を結びつけるような検討を行うとよい。
→本川と放水路における生息環境の違いを踏まえて整理する。（事務局）
- ・鳥類の種類数の経年変化については、近年概ね横ばいとのことだが、周辺地域の類似した環境と比較して種類数が妥当か確認できるとよい。
→河川水辺の国勢調査等の既往調査結果と比較して確認する。（事務局）

<干潟再生>

- ・アサリ・ハマグリ分布と底質との関係については、モニタリング範囲内でも明確な違いが出ており興味深い。今後もアサリだけでなく、底質の嗜好性が異なるハマグリにも着目してモニタリングを行うとよい。
- ・近年の三河湾の渡り鳥の生息数の減少について、餌資源となるアサリ等の底生動物の減少によるものではないかという意見もある。豊川河口の干潟やヨシ原をモニタリングしているが、三河湾全体の鳥類相との関係性も踏まえて、長期的な事業効果を評価できるとよい。また、渡り鳥の種数や個体数については、環境省等の既存データと比較することで、再生事業の効果を把握できると思われる。
→本事業のモニタリング対象は事務所管内であるため、県や環境省等の既存データを活用して整理する。（事務局）
- ・利用者数の少ない中州や左岸側の干潟については、将来的に利用者数が増えるように積極的な呼び込みを行っていくのか。左岸側の自然干潟は、伊勢湾台風の被害を受ける前は、海水浴場として地元住民に親しまれていた。
→環境学習の場として限定的に利用するか、潮干狩りの場として積極的に利用するか

については、今後の検討会や、市との調整の中で議論していきたい。(事務局)

- ・今後の工事予定について、止水域ライン内に設定した干潟再生予定箇所の本川側上流に土砂を投入するとあるが、止水域ラインは条件によって変わる。放水路側には土砂の堆積傾向もみられるため、流況のシミュレーションをするとよい。
→止水域ラインは平成23年度の実際の出水時に地形を維持していた範囲を参考に設定している。今回提示した工事予定は、造成に向けた試験的な施工であり、土砂投入後の状況のモニタリングを行う予定である。(事務局)
- ・干潟再生予定箇所の止水域の環境は、本川と放水路の流量や干潟地形によって決まる。汽水域で干潟の微地形を再現する数値解析モデルは難しいかもしれないが、干潟再生にとって最適な地形を検討できるとよい。掘削予定箇所については、掘削後の表層粒度とそれに伴う生物相の変化をモニタリングする必要がある。
→今後、アサリを指標種として、モニタリングを行いながら検討していく。(事務局)

<アサリ着底稚貝調査>

- ・三河港湾事務所の既往調査において、3~4月に着底稚貝が豊川河口から海域に移動することが示唆されている。今回、3季目(令和元年秋~令和2年春)の河口部でも同様の傾向が得られたとのことで、これまでの見解に間違いはないと思われる。
- ・着底稚貝の分布状況から、河口部の着底稚貝は3~4月にかけて海域に移動するとのことだが、移動元と移動先で個体数の収支は合うか。
→海域部の方の個体数が多いため、他に供給源があると考えられる。(事務局)
- ・着底稚貝が3~4月に河口から海域に移動するという仮説に対して、流況との関係をどのように解釈するか。水温や塩分が移動に関係しているということを検証するのは難しい。
→着底稚貝が移動を開始する引き金となる要因は特定できていない。仮説検証のため、移動開始前の1~2月に、流況に加えて水温や塩分の連続観測を行うことを検討する。(事務局)
- ・大潮の時期に干出する場所にて、干潟内の泥温と、着底稚貝の移動のタイミングの関係性に着目した解析を検討してほしい。
→現在予定している調査地点は全て干出しない地点のため、比較的地盤高の高い箇所で泥温の観測を行うことを検討する。(事務局)
- ・河口部の底層付近の3~4月の流況のデータを見ると、北東-南南西の往復流となっているが、ADCPによる面的な流向・流速ベクトル図は東西方向の流れであり、両者に相違があるため、データ取得時の状況を確認する必要がある。
→1月に実施したADCPによる事前調査で、調査地点は特異な流れのない地点であることを確認して、流況の連続観測を実施している。一方で1月と3~4月とでは、季節的な違いがある可能性もあるため、今年の10月から行う4季目調査では、1~4月の連続観測を行い、再確認する予定である。(事務局)
- ・稚貝は餌料となるナノプランクトンが増加した時に育つことが報告されており、着底稚貝の餌料環境にとって、植物プランクトンのサイズが重要である。今後の検討におい

て、栄養塩の動態と、ナノプランクトン発生状況のメカニズムの解明は重要であると考
えられる。

→どのような既往知見やデータがあるかを確認して、引き続き検討する。(事務局)

4. 閉 会

以上